学生大使　実施報告書

氏名：鈴木　智紗
学部・学科（コース）・学年：人文社会科学部人文社会科学科グローバル・スタディーズコース２年
派遣先大学：新モンゴル学園
派遣期間：２０２４年2月２６日～２０２４年3月１１日

１　日本語教室での活動内容

単語を並べ替えて自然な日本語文を作るアクティビティを行った。問題作成において、クラスのレベルにあった問題を出せるように、日本語能力検定のＮ５～Ｎ３の文法を７種類ずつ用いた。問題は基本「質問文」と「回答文」の２文になるようにし、用意した単語は、１つ不要でそれ以外はすべて使うようにした。

授業では、自己紹介をしたのち、クラスの人数をみて４～５グループに分かれて問題に取り組んでもらうようにした。文が完成したグループから私が確認し、正解した場合次の問題を解く。１文目を多く問題を解いたグループに日本のお菓子をプレゼントすることとし、グループごとに競争する形をとった。多くの問題を解いてほしかったため、なかなか正解が見つからない場合はヒントを出した。

どのクラスも積極的に参加していて、勉強しているレベルより上の問題を解くグループもあった。問題を作成するときはうまくできていると思っても、いざ学生に解いてもらうと自然な日本語文になっていなかったり、２通りの答えができたりと失敗もあった。そのたびに家に持ち帰り、修正して２週間目の授業はうまくできたと感じた。

また、日本語授業のサポートも行った。授業サポートを行った高専１年生のクラスはひらがなとカタカナを覚えたてで、日本の昔話を１分間でどのくらい読めるかに挑戦する授業だった。担当したグループの生徒はやる気があり、何回も挑戦しそのたびにさらに多くの文を読めていて、努力する姿がみられた。ほかのクラスでは、会話メインで授業を行っており、日本語で多くの質問をしてくれた。日本語がうまい生徒がサポートしながらほとんどの生徒と会話ができた。

２　日本語教室以外での交流活動

高専と高校でそれぞれ「日本語祭り」があり、どちらも日本料理のブースを担当した。高専ではおにぎり、高校では味噌汁を作って提供した。おにぎりつくりでは、高専の学生に手でおにぎりをつくるやり方を教えたり、おにぎりの具を提案したりした。おにぎりを高専の学生と一緒に作りながらたくさん話をして、とても楽しい時間になった。味噌汁は、白みそとわかめと豆腐で作った。モンゴルへ行く前に調べたところ、味噌汁はモンゴル人の舌に合わないという事だったが、ほとんどの学生がおいしいと言っていて、驚いたのとうれしい気持ちになった。また、高専の日本語祭りでは、閉会式で行われた１年生の劇を見た。一寸法

師やかちかち山、桃太郎などをセリフやナレーションを日本語で発表してくれた。オリジナルの物語に学生たちでアレンジしたセリフや登場人物などがあり、とても面白かった。

ほかにも、新モンゴル学園の授業を見学した。日本語の授業では、見学したクラスが学年で一番レベルが高いということだったが、想像した以上にレベルの高い内容をしていた。学生の隣に座って、練習問題を一緒に解いたりもした。また、小学校と高校の英語の授業を見学した。まず一番に驚いたことは、小学校も高校もオールイングリッシュの授業を行っていて、授業中の指示や単語の説明などすべて英語だったことである。また、小学校は５年生の授業を見学したが、need と want の違いについてグループに分かれて要約・発表・ディスカッションをしていた。日本の学校よりもはるかに授業の質や雰囲気が異なり、私にとってかなり刺激になった。

また、ほかの学生大使が企画したあやとり講座では、新モンゴル学園の小学生と一緒にあやとりでほうきを作ったり二人あやとりを教えながら交流した。初めは数人だったが、徐々に人数も増えてたくさんの小学生と一緒に日本の遊びができてとてもいい経験になった。

さらに、工科大学の学生２人と学生大使２～３人でモンゴルの観光地にいった。日本語が堪能な方だったため、モンゴルのタクシーに乗って運転手さんとも日本の話をしたり、モンゴルの歴史や今を教えてもらったりしながら多くのところを回った。

ホームステイでは、英語や日本を使いながら話した。ホームステイ先の学生は日本のアニメが好きで私もアニメが好きなこともあり休日に一緒に見たり、アニメに出てくる日本の料理について話したりした。また、ホストマザーは休日に郊外にあるウインタースポーツ施設に会社のメンバーと連れて行ってくれて、素敵な思い出ができた。滞在中に国際女性デーがあり、感謝の気持ちを込めて花束をプレゼントしたりもした。

３　参加目標への達成度と努力した内容

渡航前の講義で書いた目標のほとんどを達成することができたと思う。私が一番に目標としていた「文化交流」と「現地の人とたくさん会話すること」に関して、ホームステイ先で日本のカレーを作ったりアニメを見たり、モンゴルの伝統料理をホストファミーと作ったりすることができた。日本について聞かれることも多かったが、おなじくらいモンゴルについて知りたいことも多かったため、日本にいるとき以上に意識してホストファミリーや一緒にモンゴルを観光してくれた学生に話しかけるようにした。さらに、現地の言葉を教えてもらって簡単な挨拶ができるようになったので、現地の人と少しはコミュニケーションができるようにもなった。

４　プログラムに参加した感想

今回このプログラムに参加して、とても貴重な経験ができたと思う。新モンゴル学園では日本の学校と同じように給食があったり廊下でのあいさつがあったりする一方で、授業中の発言の多さや授業の当日変更が多いなどモンゴルらしい面もあって、不思議な感覚だった。新モンゴル学園の生徒は困っているクラスメイトをすぐ助けているところを何回も見て、日本とは違うなと感じた。また、違う文化や価値観を持つ人と２週間暮らしてみたり、会話し

たり、自分にない考え方やモンゴルならではの習慣などが体験できた。すべて日本にいるだけではできないことばかりで、とても刺激になった。日本から出てほかの国に行ったり、海外の人と話したりするハードルが下がったように感じ、さらに多くのことに挑戦したい気持ちが高まった。また、新モンゴル学園の学生は日本語や英語など話せる人が多く、自分も話せるように努力しようと思う瞬間が多くあった。そして、一緒に行ったほかの学部の人からも影響を受けた。ほとんどの人が夢や目標をもって努力しているのを見て、あこがれとともに自分が何をしたいのか考えるきっかけにもなった。

５　今回の経験を踏まえた今後の展望

今後は、ほかの国にも行ってまた違う文化に触れてみたいと考えている。学生大使のプログラムに参加したことによって、異なる文化・価値観・言語を持つ人と話すことができたことがとてもいい経験になったと感じる。また、英語の勉強に力を入れて、もっとスムーズに深く話ができるようにしたい。新モンゴル学園の学生は英語を話せる人がとても多かったのにもかかわらず、自分がうまく話せず受験のために勉強した知識だけではたりないと感じたためである。

学生大使のプログラムで経験したことを忘れず、今後の大学での活動を広げていきたいと思う。

6　現地での活動写真

写真１　ウランバートル

写真２モンゴルの伝統料理　ホーショル

【学生大使 実施報告書】

写真３モンゴルの国会議事堂前

写真４　高専の日本語祭り　１年生の劇の様子